序 編

■第1章　明治時代における前身銀行のあゆみ

わが国は、明治維新を出発点として近代国家への道をあゆみだした。

新政府は、欧米先進国に追いつくため、富国強兵を図るとともに、殖産興業政策を強力に展開した。

その一つの柱として、乱発された政府不換紙幣を回収し、通貨制度の整備を図るため、明治５年11月、米国のNational Bank制度にならい、銀行紙幣発行の特権を認めた「国立銀行条例」を公布した。

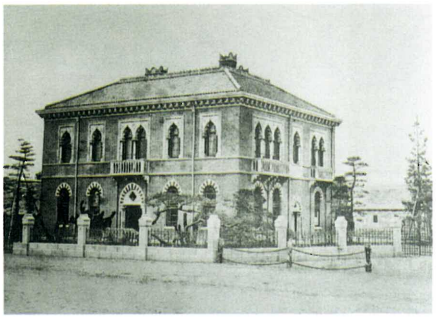
しかし、この法律に基づいて設立された国立銀行は４行にとどまり、銀行経営は厳しい状況にあった。

東京海運橋の第一国立銀行本店

９年８月、国立銀行４行の請願もあり同条例は改正され、設立を容易にした結果、銀行設立ブームが生じ、12年11月までの間に153行の国立銀行が創立された。県内においても、当行の前身である第六十九国立銀行など国立銀行４行が設立され、７年に開業した第四国立銀行と合わせ、５行となった。しかし、その後、国立銀行の設立は制限数に達したため許可されず、私立銀行や銀行類似会社の創設が相次いだ。

23年８月、政府は、「銀行条例」「貯蓄銀行条例」を公布（26年７月施行）、普通銀行、貯蓄銀行の根拠法を制定し、銀行類似会社などの整理を促進した。この二つの条例により、ようやくわが国の銀行制度が確立した。

また、10年２月の西南戦争の勃発は、戦費調達のため多額の不換紙幣を増発させ、インフレーションを高進させた。政府は、不換紙幣の回収を推進するとともに、独占的に兌換銀行券発行の特権を持つ中央銀行の設立を計画、15年10月、日本銀行を創設、金融制度の整備を進めた。



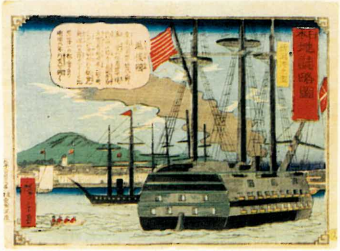
永代橋際にあった創業当時の日本銀行本店営業所

歴史の散歩道②

開港場新潟と新潟為替会社

新潟港は、幕末、安政５年の五か国条約による五開港場の一つとして、翌年12月に開港と決められたが、幕末の政情不安のなかで開港されなかった。慶応３年８月、英国公使パークスとともに来港した、通訳のアーネスト・サトウは、海から眺めた新潟の景色を次のように記録している。「目の前は砂浜になっていて、河口の右手は盛り上がったような砂丘であった。西の方にははるか弥彦山の聳(そび)え立つ峯があり、そこで眺めは尽きている」。

明治元年11月、佐渡の夷(えびす)港（両津港）を避難港として新潟港は正式に開港した。翌年１月には英国領事館が設置されて外国船が入港し始め、同年10月には関税徴収のための新潟運上所（のちの新潟税関）も開所した。２年２月、新政府は、外国貿易事務を管理させるため諸開港場に通商司をおいた。それは、通商会社と為替会社の設立をも重要な目的としていた。為替会社は通商会社への資金供給、民間産業の振興を図ることを目指すもので、新潟をはじめ、横浜、神戸など８カ所に、有力商人を中心に設立された最初の組織的な金融機関であった。新潟為替会社が設立されたのは明治２年８月であったとされる。同社は、紙幣発行のほか、官金の取り扱い、一般貸し付け、為替業務などを営んだ。これが新潟県の銀行の先駆になるものであった。しかし、放漫な貸し付けや、社員の花街での大尽遊びなどでわずか２年間で県庁の預かり金を費消してまもなく解散した。



開港直後の新潟港

佐渡夷港

そして、日清戦争後、景気が回復し、県内においても企業熱の勃興、油田開発、北越鉄道の開通を背景として、29年以降、再び銀行の設立ブームが到来した。

その後、34年の恐慌以降、景気は停滞を続けたが、日露戦争後は、企業勃興期を迎えて好況を呈した。しかし、40年にはその反動を生じるに至り、政府の景気回復策も効を奏さず、国際収支の悪化を抱えたまま大正時代を迎えることになった。

第１節　六十九銀行の創立とその後のあゆみ

１．第六十九国立銀行創立の背景

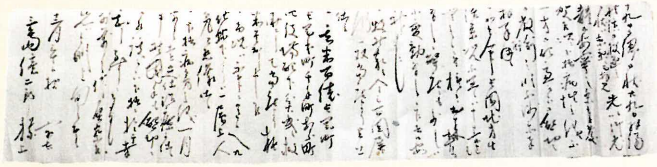
明治９年８月、華・士族の家禄・賞典禄を精算し金禄公債で交付することにした

国立銀行の設立を目指して～三島億二郎・岸宇吉の奔走～

戊辰戦争後の長岡の窮状は、明治５年ごろになってもなお続いていた。当時唐物商を営んでいた岸宇吉は、このころ、三島億二郎にあてた書簡のなかで、「長岡地方の景況よろしからず候」と記し、貧民救助のため岸屋から玄米100俵を拠出したことを知らせている。三島も、このころ、政府や県に救助米を嘆願し、士族の帰農帰商資金の調達や授産などのために奔走していた。

こうしたなか、明治９年８月の国立銀行条例改正により、長岡に銀行を設立しようとする動きは活発化し、具体的になってきた。

明治10年と推定される「五月一日夜」付の小林雄七郎から三島億二郎へあてた書簡には、「岸宇吉も相替らず銀行会社の設立の事に勉励している」と記し、「会社之儀ハ弥設立之図」と意気込んでいる。また、当時政府部内や中央で活躍していた越後出身の前島密（高田出身）や石黒忠悳（三島郡片貝出身）、長谷川泰（長岡出身）等にも協力を依頼するとともに、自らも諸官庁へのはたらきかけに努めている、と伝えている。さらに、岸ともよく相談しながら中央での設立準備・計画を進めており、手だてはほぼできあがっているので、地元では銀行の発起人等、組織の具体化についてさらに詰めて欲しい、と要請している。こうして、第六十九国立銀行の設立準備は、三島、岸を軸として、着々と進められていった。



岸宇吉から三島億二郎にあてた書簡

「金禄公債証書発行条例」の公布、正貨兌換義務の廃止や金禄公債を資本に銀行設立を認めた「国立銀行条例」の改正は、国立銀行の設立をきわめて容易にした。

たまたま、大蔵省紙幣寮に勤めていた長岡出身の小林雄七郎（小林虎三郎の弟）がことの推移のあらましを知り、いち早く郷里で士族救済に奔走中の三島億二郎にこの旨を知らせた。三島は、片腕として長岡の復興に心を砕き、経済の道にも明るい岸宇吉に相談のうえ、貧窮にあえぐ長岡士族のため銀行設立に意欲をかきたてた。

三島を中心に協議が重ねられ、10年８月、国立銀行創立願書を大蔵省に提出した。

また、発起人に名を連ねた青柳逸之助は上京のうえ銀行簿記研修のため第一国立銀行に通った。当時の長岡では容易に人材を捜し出せず、関係者自ら銀行業務全般のイロハから習熟に努めなければならなかった。

２．待望の開業

大蔵省との折衝と開業－明治11年12月20日

明治10年８月、国立銀行創立願書を提出したが、この時期は銀行創立を計画する

歴史の散歩道④

わが国銀行簿記の先駆者小林雄七郎

明治６年、わが国に国立銀行がつくられたころ、洋式銀行簿記の先駆者として、それを人々に伝習したのは、当時、大蔵省に出仕していた小林雄七郎であった。

兄虎三郎から学問の手ほどきを受けた雄七郎は、文久年間、17、18歳のころ、江戸、横浜に遊学し、漢学や洋学を学ぶとともに、英語の必要性を痛感し、米国人宣教師ダァビッド・トムソンから英語を習った。

戊辰戦争後の明治３年には慶応義塾で学び、その後、土佐の海南校に教師として赴任し、１カ年程過ごしたが、再び上京して大蔵省紙幣寮に勤めた。

明治６年12月に大蔵省が刊行した『銀行簿記精法』は、当時大蔵省に招聘されていたお雇い英国人アーラン・シャンドの原著を雄七郎が同僚梅浦精一（長岡出身）らと共訳したものである。同書は彼が役人としての最初の仕事であったが、これが、わが国における初の洋式銀行簿記導入のテキストとなり、近代簿記学の始まりともなった。

また、雄七郎は、明治22年刊行の著書『薩長土肥』のなかで、９年８月の国立銀行条例の改正を高く評価している。

小林雄七郎著『薩長土肥』

者が多く、新設は極力抑えようとする動きの最中であった。

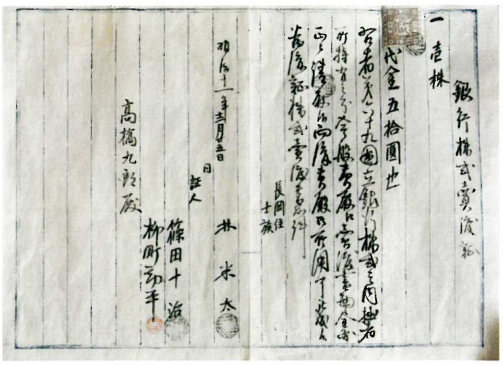
三島は、度々上京し、大蔵省との折衝を行うとともに、在京の郷土出身有力者を訪ね今後の協力を依頼した結果、11年４月、許可書を受領した。意外に許可が早かったのは、三島の熱意もさることながら、側面から大蔵省への懸け橋となった小林雄七郎らの支援を見逃すことができない。

そして、11年10月、県令から奥書をもらった創立証書などを大蔵省へ提出、翌11月、開業免状と創立証書を下付され、同年12月20日、１株50円、総株数2,000株、資本金10万円をもって第六十九国立銀行は創業した。

開業時の株主

当初、三島らは、士族たちに株主として参加するよう呼びかけた。しかし、士族たちは銀行が何物であるかを知らず、日々の生活苦もあり、期待どおりに進展しなかった。そこで、地元商人ならびに近在地主をも勧誘し満株にこぎつけた。

第六十九国立銀行の設立には、多く


士族が地主にあてた「銀行株式売渡証」

歴史の散歩道⑤

明治天皇の北陸巡幸に際しての三島億二郎と大蔵卿大隈重信との懇談

明治11年４月２日、銀行創立の許可書を受領し、続いて三島億二郎は、開業免状の下付に向かって奔走した。そのころには、銀行条例の改正により、大蔵卿の権限が拡張されて銀行の創立には大蔵卿の判断がより重要なものとなっていた。

こうした折、同年９月22日、明治天皇の北陸巡幸に供奉（ぐぶ）して、参議・大蔵卿大隈重信が来岡した。この日、天皇から長岡復興の功績を賞された三島は、大隈とも懇談、現況を報告した様子である。

11月２日、待望の開業免状が下付され、12月３日、三島と第六十九国立銀行の初代頭取関矢孫左衛門は、大蔵卿大隈重信邸を訪ね、これまでの高配を深く謝している。

そして、12月20日、第六十九国立銀行は開業した。

御巡幸御途中・御馬車之節御列之図

の士族が株主として参加したが、その後の士族の衰退・離脱に伴い、零細な士族株主による株式売却がみられ地元商人や近郊地主との入れ代わりが進んだ。また、大株主や役員の構成は、商人と地主が中心であり、「士・商・地の協力による銀行」というより「商・地の主導型銀行」というべきものであった。

３．創業当時の状況とその後の動向

紙幣の発行

大蔵省は、明治12年１月、第六十九国立銀行の銀行紙幣の発行を許可した。そこで、第六十九国立銀行では、同年２月に資本金の８割とされた８万円の銀行紙幣を大蔵省から受け取り、発行紙幣の引換準備金として決められた２万円を通貨（政府紙幣）で保有した。こうして、待望の紙幣発行を行い、同年６月末の発行紙幣流通高は全額の８万円となった。

第六十九国立銀行発行の紙幣

相次ぐ増資と時価発行

開業まもない明治12年10月、西南戦争後のインフレーションが高進するなかで、旺盛な資金需要に対応するため、５万円増資して資本金を15万円とした。

さらに、13年10月、15年11月に増資を行い、資本金を35万円に増額し、旺盛な需要による資金不足をカバーした結果、第六十九国立銀行の資本金は、７年３月に開業した新潟第四国立銀行と同額となった。

この３回の増資において特筆すべきことは、その都度いまでいう時価発行を行ったことであり、当時としてはまさに画期的なことであった。

第六十九国立銀行の株価は、設立後まだ日が浅いにもかかわらず額面を20～30円も上回っており、そこで市価に近い価格で新株の募集を行い、額面以上の剰余金は、大部分を別段積立金として内部留保に充てた。このため、15年下期末の別段積立金の累計は、11万8,000円となった。これは同期末の預金残高（11万円）を上回り、無利息の運用原資として安定収益の確保に果たした役割は大きかった。

本店の新築

創業当初の店舗は借家だった。明治12年、事務量の増大に伴って新築することになり、4,579円余を投じて表三ノ町に敷地を購入、建設工事に着手し、同年10月から新店舗で営業を開始した。

歴史の散歩道⑥

長岡商会・長岡商業諮詢会と第六十九国立銀行

戊辰戦争後の城下の荒廃と窮乏生活を乗り切り、長岡の発展を成し遂げようとしたのは、士族を中核とし、長岡町の商人や周辺の地主たちであった。

彼らはまず、商工業の振興と交通・運輸手段の整備を目指し、さらに北海道への移民を企てて新たな活動を始めた。その拠点として組織されたのが、長岡商会と長岡商業諮詢（しじゅん）会で、いずれも第六十九国立銀行とは一体化した組織であった。

明治13年３月、同行内に事務所をおいて責任有限会社長岡商会が設立された。同商会の最大の出資者は、同行頭取山田権左衛門、取締役遠藤亀太郎らであった。ほかに初代頭取関矢孫左衛門、支配人岸宇吉らも出資し、そのほとんどが同行の株主であった。商会の頭取には遠藤、支配人に岸が就き、同行の融資先となる事業を開拓するなどの目的を持っていた。15年６月、遠藤、岸ら長岡商会の人々10人は三島億二郎とともに“北海道巡廻”に出かけた。これがのちの北越殖民社の設立に繋がるものであった。

一方、長岡商業諮詢会は、15年12月に結成された。同会は、第六十九国立銀行を会場として経済学の講義などを行っていた岸を中心とする一六（いちろく）会と、大橋佐平らの共愛社とが合体して設立された。長岡の商業の隆盛を図るため知識や経験を交換しあう場にする、ということを目的としており、いわば今日の異業種交流会ともいえるものであった。

「長岡商業諮詢会員証票」（会合に際しては必ず会員証票の提出が必要であった）

しかし、30年10月、近所の失火により焼失、再度建築し、同年12月に完成した。

第六十九国立銀行本店（明治30年新築）

創業当時の営業ぶり

創業当時の営業ぶりについて、渡辺六松は『奮闘之長岡』のなかで、「戊辰前後の商業」と題して「貸金と預金の利子に就いて奇体な話がある。‥‥何某へ何円貸す日歩3銭、何某より何円預る日歩3銭のことゝ書いてあって、貸金と預金の利子とが同じい率だ。そこで其帳面を扱う手代に質問すると、其返事が面白いじゃないか、同じ利息で貸したり預かったりすれば差引が丁度いゝ、帳面をつけるには至極都合がいゝといった様な調子であった。‥‥」と述懐している。今日では想像もできないのんびりした話である。

最初の出張所・栃尾出張所の開設と閉鎖

明治13年10月、第六十九国立銀行は、最初の出張所である栃尾出張所を古志郡栃

歴史の散歩道⑦

三島億二郎、関矢孫左衛門と北越殖民社

明治15年6月、三島億二郎、岸、遠藤らが北海道視察に出かけたのは、長岡商会の北海道商況調査として実施されたものであった。三島はこのころ、長岡の商況の不振と、米価の下落による近郷農村の窮乏を打開するために“北の大地”北海道への開拓、移民を企てていた。

19年1月、長岡本町坂之上町の三島宅に本社をおいて北越殖民社が設立された。

当初の出資者には、三島、岸のほか、関矢孫左衛門と山口万吉、小林傳作、渡辺清松らの取締役を始めとする第六十九国立銀行関係者が多くおり、長岡および近辺の商人や地主など各地の有力者たちの援助を得た。同社の目的は、県内の農民たちに北海道開拓によって土地を持つことができる機会を与え、民衆生活救済の一助にしようとするものであった。三島は、17年1月、同行の第3代頭取に就任し、24年1月まで7年間務めたが、その間にも同行役員・関係者らと一緒に5回にわたって渡道し、開拓、移民事業を軌道に乗せた。

ことに三島は、肝胆(かんたん)相照らしていた関矢に対しては、養蚕や開拓使所有地の貸し下げなどについての尽力を期待しており、19年8月の彼の日記には、「関氏(関矢氏)も当開拓殊に理財に長けたる人故、感じ深くありし、予は初めより大に氏に望みを囑(しょく)し‥‥」と記している。関矢は、22年2月、同社の社長を引き受け、札幌郊外の野幌へと開拓事業を拡げていった。

野幌の北海道開拓百年記念塔

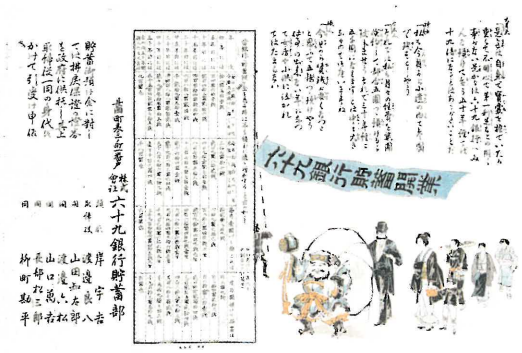
尾町に設置した。当時の栃尾は西南戦争後の好況で、９年ごろに始められた節糸織（ふしいとおり）により織物業が活況を呈し、栃尾町有志によって出張所の設置が強く求められた。

しかし、15年６月、大蔵省から、「国立銀行出張所は自今設置相成らず、現に設置の向きは本年12月限り相廃すべし」との通達があり、第六十九国立銀行栃尾出張所はわずか２年で閉鎖され、栃尾誠信社が継承した。

４．株式会社六十九銀行に衣替え

六十九銀行としての新発足と貯蓄業務の開始

明治31年１月１日、「国立銀行営業満期前特別処分法」に基づき、第六十九国立銀行は、普通銀行－株式会社六十九銀行と改称して新発足し、国立銀行開業免状を還付した。資本金は従来の35万円に、諸積立金・紙幣消却原資積立金・紙幣消却金35万円および新たに株主の払込金35万円を加え105万円とした。



貯蓄業務の開始広告

そして、同年３月には、資本金105万円のうち３万円を割いて貯蓄部の資本金とし、貯蓄業務を開始した。

新潟支店開設

第一銀行（現第一勧業銀行）は、地方の金融は地方銀行に一任する方針に基づいて、明治33～38年にかけて地方の支店整理を進め、新潟支店と長岡出張所も対象においた。

38年２月ごろ、新潟支店と長岡出張所を、六十九銀行に譲渡する話が内々に進められ、同年６月、六十九銀行へ引き継ぎ、六十九銀行は新潟支店を新潟市上大川前通八番町の第一銀行新潟支店跡に開設した。なお、同行新潟支店長の松井吉太郎は、同年７月、六十九銀行取締役に選任され、43年10月には第５代頭取に就任している。

新潟支店（大正15年２月新築）

第一銀行新潟支店の業務いっさいを引き継いで開設された六十九銀行新潟支店は、明治時代における六十九銀行の唯一の支店であり、業績の伸展に大きく貢献し、42年ごろの預金面では、全店の30%強を占めるまでに成長した。

“石油の町長岡”の活況と北越鉄道

「始めて赴任したのは越後のどこかであった。越後は石油の名所である。学校の在る町を四五町隔てゝ大きな石油会社があった。学校のある町の繁栄は三分二以上此会社のお陰で維持されて居る」――明治40年1月、『ホトトギス』に発表された夏目漱石の「野分（のわき）」のなかの一文は、長岡地方の石油事業が活況を呈していたことを如実に物語っている。

浦瀬山（うらせやま）、加津保沢（かつぼさわ）（長岡市）と比礼（ひれ）（栃尾市）地内などからの出油による東山油田の開発は、明治17年、長岡千手町の醸造家小坂松五郎が浦瀬山の路面に滲出（しんしゅつ）した“あぶら”に着目したことから始まった。20年、小坂は浦瀬山腐沢（くさりざわ）、榎峠で石油の試掘を開始し、翌21年4月、北越石油会社を設立したことから、東山油田は企業経営による創業期を迎えた。

23年には、松田周平を社長として山田又七らが長岡石油会社を創立し、24年、高津谷石油会社、大平石油会社などが続々と設立され、群小石油企業が乱立し、わずか5年間程で会社数は約430社となり、いわゆるオイルラッシュが出現した。石油株の売買取引が盛んとなり、女仲買人が活躍したのもこのころであった。

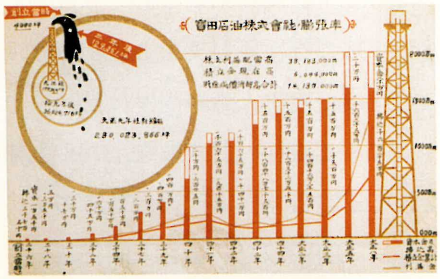
26年、山田又七は宝田（ほうでん）石油会社（のち、日本石油と合併）を創立し、28年ごろにかけては日清戦争の好景気で石油事業はますます隆盛となった。

31年12月、北越鉄道の春日新田（直江津の仮停車場）―沼垂（新潟市）間が全通した。そして、32年9月には、長岡から直江津回りで東京への鉄路が直結し、鉄道輸送の利便性が大幅に向上した。その結果、長岡の石油が東京まで直通で送られることになり、長岡の石油業は大きな発展をみせた。また、金融界もいっそうの活況を呈した。

六十九銀行・長岡銀行はともに石油業と関連企業を資金面から援助し、石油株購入の資金需要にこたえ、最盛期の東山油田の活況を大きく支えた。

当時刊行された『北越石油業発達史』掲載の六十九銀行の広告には、「得意先には各地送金無手数料にて取扱申候」と記してあり、各地に点在する石油企業などへのサービスに努めていたことがうかがえる。

明治35年当時の六十九銀行・長岡銀行の広告（『北越石油業発達史』所収）



宝田石油が大正9年に発行した絵はがき

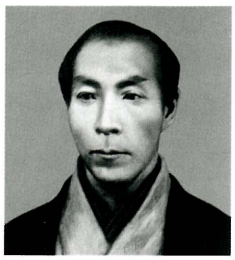
５．歴代頭取

明治11年の開業において、初代頭取には、三島億二郎の推挙により、関矢孫左衛門が就任した。

関矢は、北魚沼郡並柳の素封家で、９年には第14大区長を拝命していた。第六十九国立銀行と深いかかわりを持つようになった経緯は明らかではないが、熱血漢で統率の才に優れ、経理にも詳しく、かねて知己であることから三島が力を貸すよう頼んだものと思われる。

初代頭取 関矢孫左衛門

ところが、翌12年４月、県から関矢に対して北魚沼郡長就任の要請があり、辞令を交付された。郡長職は兼務が禁止されているので、関矢は辞任し、後任として取締役兼支配人の山田権左衛門を推挙、５月、第２代頭取に山田権左衛門が就任した。


第２代頭取 山田権左衛門

山田は、廃藩後、第４大区長などを歴任し、剣道、謡曲に

歴史の散歩道⑨

初代頭取関矢孫左衛門の役割

明治11年12月20日、第六十九国立銀行は開業した。翌年１月24日、銀行創立に奔走し、実現させるのに大きな力となった在京の小林雄七郎は、初代頭取関矢孫左衛門に書簡を送った。それには、「旧臘（きゅうろう）二十日　弥（いよいよ）銀行開業ニ至り、爾来（じらい）気配よろしく近遠之が為に利訳を蒙（こうむ）る景況を発し候赴、・・・・」と記し、銀行の開業によってまず近郷遠在の利便、利益が増したことを挙げて「郷里の一大幸福」と喜びを表現している。

初代頭取関矢と、２代頭取山田権左衛門とによって代表される近郷地主は、創業時、多くが銀行の役員になった。このことは彼ら近郷地主たちはかなりの資力を持ってはいたが、銀行経営に特に強い関心があったというわけではなかった。端的にいえば、士族を代表する三島億二郎と、長岡商人を代表する岸宇吉は、関矢、山田ら近郷有力地主たちが持っていた、大区長などの当時の社会的経歴や、地域における昔からの声望などに着目し、いわば近郷遠在の人々に対する彼らの絶大な影響力により、営業基盤の確保と拡大を図ろうとしたのであった。

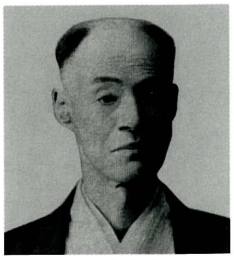
そして、彼ら自身もそのことは明瞭にわきまえながらも、銀行の実務については終始、三島、岸らの補助的役割を果たすことに徹して、彼らが担うことのできる本来の役割を遂行していった。

明治10年ごろの長岡近郷大区の区割り図
（『越後摘誌』巻之上所収）

優れていた。４年余頭取を務め、この間の３回の増資において、岸宇吉の意見を採り入れ、いまでいう時価発行増資を行い自己資本の充実を図った。

第３代頭取 三島億二郎

山田は、従前から眼病を患っており、明治16年初め上京し、治療に専念したが、なかなか快方に向かわず辞職を決意、後任には古志郡長を辞任して北海道開拓に取り組もうとしていた三島億二郎を迎えることにした。


第４代頭取 岸宇吉

17年１月の株主総会において、三島は取締役に選任され、互選の結果、三島億二郎が第３代頭取に就いた。

三島は、戊辰戦争後、長岡の再興に尽力し、第16大区長などを務め、銀行創設の中心的役割を担ったが、こうして頭取の任にあたること７年間、途中、19年には北越殖民社を設立し、移民による北海道開拓事業にも力を注いだ。

第５代頭取 松井吉太郎

24年１月、取締役会で互選の結果、岸宇吉が推されて、第４代頭取に就任した。これまで裏方として三島をもり立ててきた岸が初めて表舞台に姿を現した。

岸は、頭取として約20年にわたり銀行経営の重責を担ったが、43年10月、死去した。

岸の死去に伴い、後継人事について、取締役間で協議した結果、銀行経営に詳しい専務取締役松井吉太郎を推挙することにした。しかし、松井は、第一銀行新潟支店の出身であったことから、応諾することにいささかためらいを感じ、同行頭取の渋沢栄一に相談、ようやく決意し、43年10月、第５代頭取に松井吉太郎が就任した。

第２節　長岡銀行の創立とその後のあゆみ

１．新銀行設立の波動

銀行設立の動機

明治29年２月、新潟市において北越鉄道㈱の株主総会が開催された。その際、大塚益郎（三島郡片貝村）・久須美秀三郎（三島郡小島谷村）・渋谷初次郎（南蒲原郡郷分村）・渋谷善作（南蒲原郡郷分村）の有力者４人が会談、長岡に第六十九国

立銀行のほかにもう１行の設立を論議し、銀行新設がにわかに具体化した。３月に入り、山口権三郎らも誘い準備が進められ、設立に向かってあゆみ始めた。

新銀行出現の評判

新銀行の出現は、地元長岡はもとより、新潟県内に大きな期待を抱かせた。明治29年３月の長岡銀行創立事務所『日誌』第１号をみると、「株式の予約申込者が引きも切らず、謝絶の申し訳に忙しかった」などの記述があり、前評判は非常に高かった。

長岡銀行創立事務所『日誌』(左から、日誌第１号、明治29年２月25日の日誌、同年３月29日の日誌)

２．長岡銀行の誕生とその後の業況

設立許可書入手と開業

明治29年８月、第１回創業総会を開催し、設立願書を当局へ提出、同年10月、設立許可を受け、資本金50万円（払込12万5,000円）の株式会社長岡銀行の設立が本決まりとなり、11月10日開業した。

なお、山口権三郎は、安田銀行の創立者安田善次郎とは維新前から交際があったようであり、長岡銀行の開業に先立って渋谷善作を銀行業務見習いのため同行に出向させている。また、長岡銀行は、開業まもない11月16日、安田銀行と為替契約を締結するなど、同行とはきわめて親密であった。

開業当時の本店

県内最初の貯蓄業務を兼営

明治31年当時、長岡には複利により小額の貯蓄を預かる貯蓄銀行がなく、また、県内において、貯蓄業務を兼営する普通銀行もなかった。

長岡銀行では、かねてから貯蓄奨励のため、貯蓄業務の準備を進め、大蔵大臣の許可を得て、31年３月、資本金50万円のうち３万円を貯蓄部の資本金とし、貯蓄業務を兼営した。長岡銀行の貯蓄業務兼営は、六十九銀行より２日早く、県内の普通銀行では最初であった。

相次ぐ出張所の開設と支店網の充実

長岡銀行は、創業当初から六十九銀行を目標にして“追いつき、追い越せ”を合言葉に業容の拡大に専念し、積極的な店舗展開を図った。

最初の出張所開設は、明治33年８月の神田出張所であった。次いで、34年３月に三島郡片貝村に出張所を設置した。

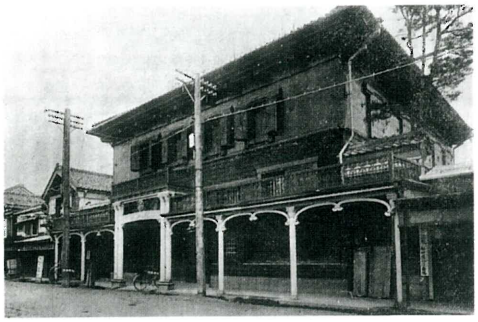
その後も、36年４月に小千谷出張所、38年４月に栃尾出張所、40年４月には高田出張所を設置した。さらに、42年10月に柏崎支店、44年11月には五泉支店を開業し、県内主要地への支店網の充実を行った。この間、出張所であった各店も支店に昇格させ、県内に７支店を擁することとなり、名実ともに地域に密着していった。

本店新築

明治35年４月、本店店舗は手狭なうえ、腐朽がはなはだしいため筋向かいに土地を入手、建築工事に着手し、年末までに移転する予定であった。

しかし、堅牢な土蔵造りのため工事が進捗せず、新店舗で執務したのは36年５月であった。

そして、新築祝いとして預金者に贈呈した湯飲み茶碗が効果をあげたのか、開店翌日からの３日間で、預金者は8,500人、金額は１万8,000円に及んだ。



長岡銀行本店（明治36年新築）

長岡銀行新築落成記念の贈答品（明治36年）

歴史の散歩道⑩

初代頭取山口権三郎の活躍と長岡銀行の盛業

長岡銀行は、西山油田、東山油田の開発がもたらしたオイルラッシュと北越鉄道の設立などを背景として開業し、発展した。

これらの事業の先鞭をつけたのは長岡銀行の初代頭取となった山口権三郎であった。

明治21年５月10日、日本石油会社を創立して同社の理事に就任した山口は、翌年早速洋行し、米国の油田を始め、欧米の石油事情を調査してその成果を取り入れた。

22年４月25日に横浜港を出帆して欧米巡遊の途に就いた山口は、まず米国でライマンに会って懇談し、石油採掘の助言を得た。ライマンは、明治初期に来日して、西山や、東山の浦瀬山辺りにも足跡を印した地質調査技術者であった。山口はさらに米国各地の製油所や油田を見学しその近代的な機械力を用いた製油・さく井作業の威力に感服して、旅先から日本石油会社に米国式綱掘（つなぼ）りさく井機械の導入を提案するほどであった。

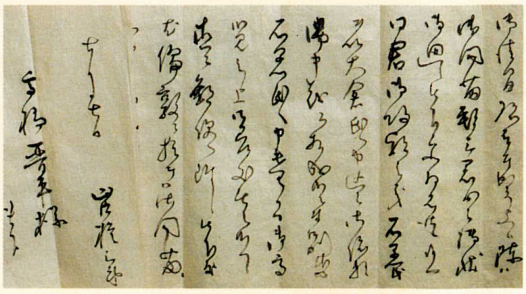
その後、６月23日には英国に渡り、同郷の高橋邦三の案内でウィンザー城などを見学し、７月４日には尾崎行雄とともに国会の傍聴に赴いた。尾崎とは彼が新潟新聞の主筆時代からの知友で、フランス、ドイツにも行動をともにした。その後、インド、中国などを回り、翌23年３月２日、長崎に帰着した。帰国後の同年７月７日付の高橋晋平（邦三の父親と思われる）にあてた書簡には、ロンドンで邦三から受けた懇情に対して丁重な謝意を表している。また、当時貿易業の大倉組商会ロンドン支店に勤務していた邦三の帰朝について石黒忠悳を通じて経営者の大倉喜八郎に要請するように配意した旨知らせている。山口が維新前から厚い交際のあった安田善次郎を始めとし、中央の官、財界の有力者と深い繋がりを持っていたことがうかがえる。

山口の６年間にわたる初代頭取在任中に長岡銀行は著しい伸長をみせた。山口の死後、36年１月、長男達太郎が２代頭取に就き、５月には裏二ノ町に本店を新築した。

東山油田　浦瀬山手掘り井戸の景

そして、37～38年の日露戦争後、一時途絶えた資金需要を折からの企業熱の勃興で乗り切った同行は、39年９月23日、開業十周年記念祝賀会を挙行した。午後１時から同行で行われた祝賀会は250人余の出席を得て盛大であった。山口頭取の式辞に続いて、安田銀行の創立者安田善次郎が演説した。その後、初代市長牧野忠篤が祝辞を述べ、日本銀行理事木村清四郎が演説した。これらの“東京賓客”の後に、六十九銀行を始め北越鉄道、宝田石油など地元の銀行、会社の代表者たちが次々に祝辞を述べた。式後、長岡館の４室で祝酒が呈された。

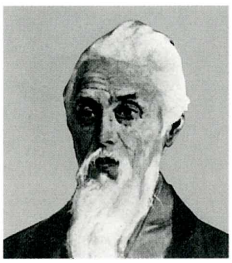
この年、日露戦争後の投機熱を反映して宝田石油株が高値となり、市況も活況に溢れた。石油株が県外で買われ、歳末には、安田善次郎も宝田石油株、日本石油株、各1,000株を買い入れている。また、宝田石油からは同行に14万円の預金があって、近来にも増した盛業ぶりをみせた。



７月７日付、山口権三郎から高橋晋平あて書簡

3．歴代頭取

明治29年８月、第１回取締役会を開催、山口権三郎を頭取に互選、10月の設立許可により初代頭取に山口権三郎が就任した。35年10月、権三郎が死去したのに伴い、翌36年１月には長男山口達太郎が第２代頭取に就いた。


初代頭取　山口権三郎

第２代頭取　山口達太郎

山口達太郎は、23歳で柏崎厚信社（柏崎銀行の前身）の監査委員となり、その後、大正９年まで柏崎銀行取締役を重任、その間、明治32年から35年まで同行頭取に就任した。

また、37年には衆議院議員に当選した。このほか、百三十九銀行、新潟県農工銀行、日本石油、北越水力電気、日本電気工業の取締役および新潟鉄工所社長などに就任した。